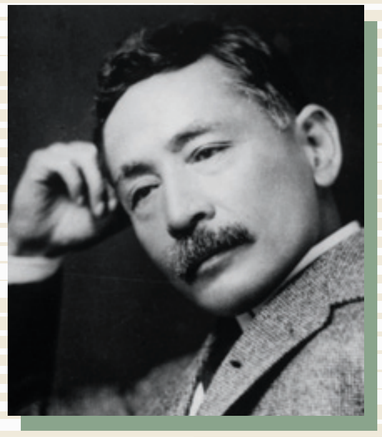
夏目漱石の足跡を追いかけて

明治の文豪・夏目漱石は、新宿で生まれ新宿でその生涯を終えました。

漱石が生まれた場所、歩いた道、作品を書いた家など区内にはゆかりの地がたくさんあります。

今年は、漱石生誕140年です。今回は、漱石を愛する区民の方とともに漱石に関係する場所を歩き、貴重なお話を伺いました。



【問合せ】区政情報課広報係（本庁舎3階）☎（5273）4064へ。

明治の文豪が生まれた地～夏目漱石誕生の碑

1867年（慶応3年）この地（喜久井町1）で漱石は生まれました。現在、碑のすぐ近くにお住まいの加藤利雄さんが話してくれました。「生誕碑の奥の方に夏目家がありました。当時ここは牛込馬場下横町という町名でしたが、江戸が東京になった時に、父親の夏目直克が、夏目家の家紋『井桁に菊』にちなんで隣接の数町を合併して『牛込菊井町』、前の坂を『夏目坂』と名付けました。父親は町名主ということで影響力があったのではないでしょうか」「新宿にこの地名が残っていること、ここで夏目家が暮らしていたことを、地域の皆さんとともに語り継いでいきたいと思います」

近くで代々大工を営み、先祖が夏目家へ出入りしていたという鈴木清一さんは「わたしが子どものころは、この辺りは下町情緒があふれるまちでした。大雪が降ると、この夏目坂でそりをした記憶があります」と話してくれました。

加藤利雄さん

漱石山房があった場所～区立漱石公園

現在の漱石公園の場所（早稲田南町7）に、かつて「漱石山房」と呼ばれた家がありました。漱石は晩年、ここで執筆活動を行い「三四郎」「こころ」「明暗」などの作品を書きました。山房には、芥川龍之介、森田草平、寺田寅彦など、後に文士や学者として活躍する人々が出入りしていました。

中谷美由紀さん（写真左）と谷中靖子さん

区が、漱石公園をリニューアルするために呼び掛け、集まった方が検討を重ねています。検討会に参加している中谷美由紀さんは、早稲田小学校のPTAの仲間である谷中靖子さんとともに、同校の3年生児童に、漱石の小説を子ども向けに分かりやすくした絵本の読み聞かせをしています。

「子どもたちは漱石にとても親しみを感じてくれています」

漱石が通った寄席を再現～居酒屋「もん」

平松南さん

漱石は、落語を好み、神楽坂のわらだな亭の寄席に通いました。

かつてわらだな亭があった場所の近くに定期的に寄席を開いている居酒屋があります。オーナーの平松南さんを訪ねました。

学生時代、漱石が晩年に達したとされる「則天去私」の境地に共感を覚えたという平松さん。「店の中に即席の高座をつくり、2か月に1回3席ずつ寄席を行っています。落語を始める前に、漱石とこの寄席の関係をお客さんに話します。区外からも漱石の愛好家が落語を聞きに来てくれます。これからも神楽坂の落語の伝統を守っていきたいですね」

「硝子戸の中」に登場する酒屋～小倉屋

漱石は、自分の子どもの時代を振り返って書いた随筆「硝子戸の中」で「間口の広い小倉屋という酒屋もあった」と紹介しています。小倉屋は1678年（延宝6年）に創業されました。小倉屋の現在の店主、栗林昌輝さんは「夏目家が住んでいた家は、わたしが生まれたころにはすでにありませんでしたが、随筆に出てくる『御北さん』は、わたしの祖母の姉です」と話してくれました。

赤穂浪士の一人堀部安兵衛が、高田馬場で敵を討つときに、小倉屋へ立ち寄って、枡酒を飲んで行ったといわれてます。随筆の中で、漱石が「見たことがなかった」と書いている枡を、今回特別に見せていただきました。

栗林昌輝さん

漱石山房を考える会

今回、一緒に歩いてお話を伺った「漱石山房を考える会」の皆さんは、現在、漱石公園のリニューアルを検討しています。昨年10月に都立戸山公園で行われたふれあいフェスタ2006で「夏目漱石コーナー」を出展しました。19年度は、「協働事業提案制度」で、区とともに「夏目漱石生誕140周年記念事業」を行います。主な事業は次のとおりです。

①小・中学生向け漱石文学のアニメ作品の紹介と会員による漱石を語る出前事業
②都電荒川線を利用した「漱石号都電の旅」の企画・実践
③東北大学附属図書館との連携による漱石文庫の展示企画
④「漱石特設ギャラリー」の開設・運営および講演会

夏目漱石が神楽坂へ向けて歩いたと思われる道程

漱石が利用した文房具店～相馬屋

神楽坂にある文房具店相馬屋は、かつて夏目漱石が原稿用紙を購入していた店です。店内には漱石の弟子だった森田草平の直筆原稿（写真右上）が展示されています。

11代目店主、長妻直哉さんは「当時はマスコミが今ほど発達していなかったので、漱石が買いに来ていたということは後に彼が世に出てから分かったようです」と話します。

「昔から作家の方の細かい注文に丁寧に対応して、その方に合った紙を提供しています。今でも一番良質な紙を提供できるよう努力し、多くの作家の方に利用していただいています」

漱石やほかの作家たちが店の前を歩いていた当時の風景が目に浮かびました。

長妻直哉さん（写真左）